

# 学童期から思春期における相互性の発達過程について

——「可逆操作の高次化における階層一段階理論」の視点から——

楠 凡 之

The Developmental Process of Mutuality from the Juvenile  
Era to Early Adolescence

KUSUNOKI Hiroyuki

## 序 問題の所在と本稿の目的

人間は生まれながらにして社会的存在であり、他者との交わりの中ではじめてその社会的な発達が成し遂げられていくということは誰しも否定できない事実であろう。

エリクソン (E. H. Erikson)<sup>1)</sup> は、「健康な子どもは、適切な指導さえ与えられるなら、発達の内的法則に従うという点で信頼できる」とし、それぞれの発達段階において、その時期における「重要他者」(significant others) との相互関係において「相互性」(mutuality) が成立していることが、内的法則に従った健康なパーソナリティの成長にとって不可欠な条件であるとした。ちなみに、エリクソンの言う、相互性とは、「自分の働きかけがそれに応じた反応を返されること、あるいはお互いの働きかけが相互に影響を与え合うこと」を意味している<sup>2)</sup>。

エリクソンに限らず、その時々の発達段階における重要他者との相互関係において相互性が成立していることが自我発達に重要な意味を持つこと、そして、その失敗が後のパーソナリティの発達に障害をもたらすことについては、精神分析の諸研究においてはしばしば指摘されてきた。しかし、精神病や重度の神経症の発症の原因を乳・幼児期の発達段階での親子の相互関係の質の問題に還元する傾向が依然として強いこと、また、他の発達の諸局面との連関の中で、自我発達、情緒発達の問題を総合的に捉える視点が弱いこと等、多くの課題が残されていると考える<sup>3)</sup>。

精神分析の流れとは別に、各発達段階に固有の個人相互の関係の質を論理操作の発達段階と関連づけて構造的に捉えようとした研究が、ピアジェ (Piaget, J.)、及びピアジェの流れを汲む社会的認知発達の諸研究の中で行なわれてきた。

ピアジェは、個人内部の操作と個人相互の操作の発達とを並行的な関係として捉え、具体的操作期における可逆性をもった論理操作の成立と並行して、個人相互の関係も、一方向的な関係から相互性 (reciprocity) をもった関係へと発達していくとした。ちなみに、ピアジェのいう相互性 (reciprocity) とは、可逆性 (reversibility) の1様式であり、ある一つの方向からの力に対して、それとは反対方向でしかも等しい力をはたらかせることによって対称性を成立させる作用を意味している<sup>4)</sup>。ピアジェの理論は、個人相互の関係の質の発達のな変化を論理操作の発達過程と関連づけて明らかにすることを可能にし、その後、セルマン (Selman, R.)<sup>5)</sup> らが、ピアジ

エの発達段階と関連づけるかたちで対人関係理解の構造的な発達過程の研究を進めてきている。これらの諸研究は精神分析の諸研究では潜伏期 (latent period) と呼ばれ、サリバン (Sullivan, H. S.)<sup>6)</sup> 等の一部の研究者を除き、必ずしも重要視されてこなかった学童期の社会性の発達過程を構造的に明らかにした点で評価されるものであろう。

先に筆者は、ピアジェやセルマン、及びユニス (Youniss, J.)<sup>7)</sup> 等の研究を整理して、前操作後期から形式的操作期における個人相互の関係、およびその反映としての自我 (Self) の発達過程について、相互性の発達過程という観点から、次の4つの発達段階に区分しつつ記述することを試みた<sup>8)</sup>。

(1) 知覚的、直観的脱中心化によって対称性を成立させる相互性 (前操作後期) (2) 各次元を等値にすることによって対称性を成立させる相互性 (具体的操作前期) (3) 関係の相補性操作 (reciprocal operation) によって対称性を成立させる相互性 (具体的操作後期) (4) 複数の関連系の結合によって対称性を成立させる相互性 (形式的操作期)

ちなみに、ここで言う相互性という概念は、単に認知的な側面に関わっているのみならず、他者との相互関係において、等価性、対称性の確保された相互関係を実現していこうとする志向性ないしは「価値づけ」(そこにおいては認知的な側面と感情的な側面とが統一されている)をも含みこんだ概念である。

しかし、ピアジェの理論に依拠して他者との相互関係の発達のな変化を研究していく際には、いくつかの問題点ないしは制約が存在していると考えられる。1つには、ピアジェは可逆性をもった操作が成立する具体的操作期以降においてしか、個人相互の関係における相互性が成立しないとしている点である。しかし、エリクソンが述べているように、それぞれの発達段階にはその段階に固有の相互性が存在しているとすれば、乳児期からの各発達段階に固有の、内一外の相互関係における相互性の質を他の発達の諸局面と関連させつつ明確化していくことが必要であろう。2つめには、ピアジェ自身が述べているように、ピアジェの発達理論は、自己と環境との調和的な均衡の状態へと理想的に発展していく場合のプロセスを描いたものにとどまっている点である<sup>9)</sup>。しかし、今日の「いじめ」、「登校拒否」等の問題事象の深刻化に見られるように、その発達段階に固有の質を持った相互性を個人相互の関係の中に成立させ、そのことを通じて自らの社会性を発達させていくことに困難さを抱える児童・生徒が増加している中では、その背後にある社会性の発達過程におけるつまづきや歪みの問題をも普遍の中の特例として自らの理論的枠組の中で捉え、そこから、それらの児童・生徒に対する教育的な援助の在り方を示唆し得るような発達理論を構築していく必要があるであろう。

本稿では、以上のような問題点を克服していくために、以前の筆者の研究ではピアジェの理論に依拠しつつ考察した相互性の発達過程を、「可逆操作の高次化における階層一段階理論」<sup>10)</sup>の視点から再構成していくことを試みたい。この理論に依拠した理由は以下の通りである。

(1) 外界とは相対的に独立した発達の内的な合法則性を可逆操作の高次化のプロセスとして捉え、そこから内的な諸条件と外的な諸条件との相互連関を問題にしていること。それゆえ、単に理想的な発達過程を描くだけではなく、可逆操作力と可逆操作関係の矛盾 (内部矛盾) の発達の外的な困難さによって生じてくる発達のつまづきやゆがみの問題をもその理論的な枠組の中で捉えていくことが可能になっていること。

(2) 量的、質的な規定性をもった、可逆操作というカテゴリーを用いて、乳児期からの一貫した発達理論を構成しているため、それぞれの発達段階における相互性の発達の質を、他の発達の諸局面と関連づけて捉えていく理論的枠組の基礎となり得ること。

なお、本稿で提起する相互性は、ある方向からの何らかの作用に対して、それとは反対方向でかつ等価的な作用を及ぼすことによって他者との相互関係において等価性、ないしは対称性を成立させるはたらきを意味しており、その発達の質が可逆操作の高次化のプロセスと連関しつつ高次化していく、発達過程、形成過程の中での変化を捉えるための「様式のカテゴリー」である<sup>11)</sup>。このカテゴリーを用いることによって、子どもの情動・社会性の局面において、その中核を構成している人格の力量の発達過程を捉えることが可能になると現段階では考えている。

本稿では、紙面の関係で、1章で、相互性の発達過程とその反映としての内的対象関係の形成過程について、可逆操作の高次化における階層一段階理論で言うところの、3次元形成期から3次元変換形成期（通常の場合、5歳半から14歳頃）までに限定して検討していきたい。そして、2章では、情動・社会性の局面におけるつまづきの発生のメカニズムについて、今回の理論的枠組みに即して仮設的な提起を行なっていきたい。

### 1章 3次元形成期から3次元変換形成期における相互性の発達過程について

カリバン (Sullivan, H. S.)<sup>12)</sup>によれば、子どもは5、6歳頃になると生き方を分かち合うような仲間 (compeers) との共同作業 (cooperation) をつよく求めるようになり、この新しい心理的傾向に促されて、小児は「児童期」(the juvenile era) という新たな人格発展段階に進み入るとされている。この時期以降、子どもの社会性発達にとって仲間集団のような、等質的な他者との相互関係が不可欠の重要性をもち、社会性発達を主導していくようになると考えられる。

可逆操作の高次化における階層一段階理論<sup>13)</sup>によれば、通常の場合、5歳半頃の時期にあたる3次元形成期において、次元可逆操作の階層の第1段階から第2段階における人格の発達の基礎の形成をその発達の前提として、「書きことば」という新しい交流の手段の発生を伴いつつ、変換可逆操作の階層への飛躍的移行を達成する新しい発達の原動力が発生し、発達の諸局面において変換移行次元可逆操作の操作関係の準備がなされていく。

この時期の内部矛盾は、第2段階の可逆操作様式の並列化から系列化への移行に伴い、可逆操作関係は変数2として統一されているが可逆操作力は3の形成として分離せざるをえないという関係において発生する。この内部矛盾は、一方においては3の変数をもった可逆操作関係を発生させるとともに、次階層の新しい交流の手段の誕生を必然たらしめる。

情動・社会性の局面においても、他の発達の諸局面と連関しつつ、内部矛盾の外的な諸関係への発達の外在化によって、書きことばという新しい交流の手段を介した相互関係が個人相互の関係において発生してくる。

この5歳半頃の時期は、セルマンの言う社会的視点取得 (Social Perspective Taking) の第1段階への移行期に該当している<sup>14)</sup>。セルマンによれば、この時期になって始めて、個人相互の関係についての反省的な理解が発生してくるが、その関係理解は1方向的なものにとどまっており、「反省的思考 (reflective thinking) の水準における相互性」<sup>15)</sup>の理解は存在していない。

しかし、何らかの教育的な援助があれば、反対方向から関係を捉え直してみることが可能になる時期でもある。例えば、自分と友人との葛藤の原因は、通常の場合は、1方向的に捉えられているが、大人の援助等があると、関係を転倒させて反対の方向からその原因を捉えてみる事が可能になってくる。

そして、このような、「反省的思考の水準における相互関係」の発生をその発達の基礎として、仲間集団等の等質的な他者との相互関係において、個人間の要求を平等に満たすルール等を介在させることによって、個人間の等価性、対称性を実現する方法、すなわち、ユーンスの言う、「相互性の方法」(Methods of Reciprocity)<sup>16)</sup>を使用することの必要性が認識されてくる。

このように、この時期に新しく発生してくる、反省的思考の水準における相互関係は、それ自体では2方向的なものではないが、何らかの外的な諸条件が介在することによって関係を反対方向から捉えることを可能にするものであり、したがって、ルール等の外的な諸条件を介して、個人間に等価性、対称性を成立させる機能を有している。

そして、このような新たな質を持った相互関係を仲間集団等の比較的等質的な他者との相互関係の中に形成しつつ、それを自己のなかに取り入れていくことによって、情動・社会性の局面においても変換移行次元可逆操作の操作関係を準備していく。

これに続く3次元可逆操作期になると、外的な諸条件を介することによって反対方向から捉えることが可能になった個人相互の関係において、回数や時間を相互に調整する等の方法を用いつつ、「逆操作によって等価性、対称性を成立させる相互性」を実現していく。そして、個人間の等価性、平等性を成立させるルール等を使用した相互協力の関係が、遊びや仕事等の活動を通じてさらに発展、洗練されていくと同時に、そのような外界での活動を介して、情動・社会性の局面においても、この階層の第3段階の可逆操作力をさらに増大させていく。

第3段階の可逆操作力はあらゆる局面に発展を遂げて系列化しつつ並列可逆操作関係を枠梛とし、系列可逆操作関係に転じていく。やがて系列可逆操作関係が新しい階層の可逆操作力を生み、第3段階の先鋭化した矛盾としては質的転換を遂げていかざるをえなくなり、変換移行次元可逆対操作の各局面での獲得に伴って、階層間の飛躍的移行が達成されていく。

情動・社会性の局面においても、変換可逆操作の階層の第1段階の可逆操作変数をもった可逆操作力と次元可逆操作の第3段階の可逆操作変数をもった可逆操作関係との矛盾としての内部矛盾の発達の外的な外在化によって、個人相互の関係においても変換移行次元可逆対操作、ピアジェの言う、相補性操作 (reciprocal operation)<sup>17)</sup>が獲得される。

そして、仲間集団等の個人相互の関係において、書きことばをその交流の手段とする、「反省的思考の水準における相互性」の第1段階が実現され、それが内面へと反映されていくことによって、具体的な他者の視点から自己を捉える力、すなわち「自己客観視」の力<sup>18)</sup>が発生してくる。

この時期、ユーンスによれば、5、6歳以降の時期に個人相互の関係において用いられていた「相互性の方法」が「関係の相互性」(reciprocity of relations)へと変換される<sup>19)</sup>。この「関係の相互性」の成立によって、「相互性の方法」が用いられていた時期のように、遊びその他の活動において、ルール等を用いて両者の要求を平等に満たすというだけでなく、まだ、具体的な内容に限定されてはいるが、仲間集団において不平等な状態が生じている時に、その不平等を是正して個人間の等価性、対称性を成立させようとする「価値意識」が形成されていく。このように、

この階層における反省的思考の水準における相互性の成立は、単に個人相互の関係に関する2方向的、可逆的な認識の成立を意味しているだけではなく、仲間集団内部の相互関係において、平等な関係を実現していこうとする志向性、ないしは価値意識の成立をも意味しており、この時期以降、ピアジェの言う、「相互性の原理」<sup>20)</sup>が個人相互の関係における実践の原理として認識されるようになる。

ところで、この階層の第1段階においては、その個人が取り結ぶ多様な相互関係が、内的諸条件を介して内面へと反映されていくため、自我内部においても多様な「自己—他者」関係＝「内的対象関係」が並列的に存在し、ワロン(Wallon, H.)の言う「多価的人格」(Personnalité Polyvalente)<sup>21)</sup>としての特徴を備えたものとなっている。そして、その特徴は、この時期の自己認識—自らに対する多価的な理解はなされているが、それらが並列的なままに存在していて統合されていない—にも表れている。

やがて、自然的、社会的諸関係と結んで可逆操作様式の各レベルで、可逆操作力の発展が見られ、可逆操作の第1段階の矛盾が発展してくる。そして、変数1の変換可逆操作の並列化から系列化に伴い、発生してきた変数2の可逆操作力が、変数1の可逆操作関係との間で矛盾を増大させていく。

情動・社会性の局面においても、他の諸局面と連関しつつ、内部矛盾の発達のな外在化によって、それまでの個人相互の関係における相互性の質をさらに発展させていく。

田中によれば、この2次変換形成期から可逆操作期において、具体的な活動に際して、現象的には、他のグループや教師等に対する集団的な自己主張を行なうことによって「自己の領域」を集団的に広げようとするが、一定その主張が受けとめられていく中で、今度は相手の要求を受け入れ誇りをもって自制していく姿が現われてくる<sup>22)</sup>。

それゆえ、適切な援助があれば、集団相互の関係において、お互いの違い(ex. 男女の自然的差異)を認め合い、その違いを十分に配慮した上での平等な関係を実践的に創造していくことを通じて、集団相互の関係の中に、この階層の第2段階における相互性、すなわち、「複数の関連系の結合によって、多様な観点を統合したかたちで等価性、対称性を成立させる相互性」を実現していく。それによって、仲間集団等において、個人間の実践を規定する原理として認識されていた「相互性の原理」も多様な次元を統合したより高次の内容において捉えられるようになっていく。

また、変換可逆操作の階層の第1段階においては、具体的な行為や活動にもとづいて個人間の等価性、対称性を成立させる相互性であったのに対して、第2段階になると、サリバンの言う、「共人間的有効妥当性確認」(consensual valudation)<sup>23)</sup>が友人関係の中で展開していくこと等とも関わって、より内面的な相互理解や相互尊敬(mutual respect)に基づいて個人間の等価性、対称性を成立させる相互性へと発展していく<sup>24)</sup>。

そして、変換可逆操作の階層における第2段階の相互性が実現された外的な相互関係を自己の内に取り入れていくことを通じて内的対象関係の不確かさも克服されていく。

さらに、他の発達の諸局面における変数2の可逆操作様式の並列化から系列化に伴い、「相互性の原理」も、仲間集団などの身近な人間関係を越えて、より一般的な個人相互の関係を規定する原理として普遍化されていくと考えられ、田中はそれを「集団的規律の普遍化」と名づけて

いる<sup>25)</sup>。

そして、そのプロセスと連関しつつ、それまで並列的なかたちで存在していた自我内部の「自己-他者」関係=内的対象関係の統合、普遍化のプロセスが進行していく。この内的対象関係の統合、普遍化によって、それまで多面的、並列的であった自己認識が統合されていくと同時に、情動的には、自我内部における、「一般化された他者」と自己との相互関係における相互性の成立に伴って、変換可逆操作の階層における「自己受容」(Self-acceptance) がなされていく。

このような内-外の相互関係における変換可逆操作の階層における第2段階の相互性の成立、さらには普遍化のプロセスを介して、情動・社会性の局面における可逆操作力と可逆操作関係との矛盾がさらに発展していく。

変換可逆操作の階層における第3段階の矛盾は、第2段階における可逆操作力と系列可逆操作関係との矛盾として、すなわち、可逆操作関係は2として統一されているが、可逆操作力は3の形成として分離せざるをえないという関係において発生する。変換可逆操作の階層における可逆操作関係は新しい質の可逆操作力を生まざるをえず、その不確定さは次階層である、「抽出可逆操作の階層」における新しい交流の手段、「抽象的思考を中心とした新しい交流の手段」の誕生を必然たらしめる<sup>26)</sup>。

情動・社会性の局面においても、次の階層において発達を主導する可逆操作関係の諸局面での発生と連関しつつ、新しい交流の手段を介した相互関係が発生してくる。

この時期は、現象的には、「自分とは何なのか?」「生きることの意味は何なのか?」という問いかけに見られるように、友人等の具体的な他者との相互関係のみならず、「抽象的他者」<sup>27)</sup>とも呼び得るものとの相互関係においても自己を捉え始め、それによって、確固とした「自我同一性」(Identity) の確立に向けての模索が開始される時期である<sup>8)</sup>。

それと同時に、抽象的思考をその新しい交流の手段とする、「価値的な水準における相互関係」が発生してくる時期でもある。すなわち、それまでは、価値的な水準においては、そのような価値の具体的な担い手としての両親や教師との関係において1方向的な従属の関係に置かれていた子どもが、外界から取り入れた何らかの価値を拠り所としながら、その関係を転倒させはじめる。

変換可逆操作の階層の第1段階から第2段階の時期における両親や教師への反抗が、内的対象関係の不確定さを確定、さらには統合していくための発達要求の現象的な表現であったのに対して、この時期の大人への反抗は、何らかの人物や集団(田中の言う「社会的自立モデル」<sup>29)</sup>)等に「同一化」することによってその価値を取り入れ、その価値に依拠しつつ、それまで価値的な水準においては従属的な関係に置かれていた教師や両親との相互関係を転倒させようとする試みであると考えられる。

ところで、3次元形成期において、反省的思考の水準における相互関係の認識が1方向的であったと同様に、この3次元変換形成期においても、価値的な水準における相互関係の認識は1方向的なものにとどまっている。それゆえ、この時期の発達の制約を反映して、「抽象的な他者」ないしは価値をその背後に担っている具体的な他者との相互関係は1方向的なものとなりがちである。例えば、自分が同一化し、自らの価値の源泉としている社会的自立モデルとの相互関係では絶対肯定の関係であるが、それ以前の時期に自分がそこから価値を取り入れていた両親や教師との相互関係では絶対否定の関係というように、絶対肯定と絶対否定とに分裂した外的な相互関

係を取り結んでいく場合も生じてくる。

また、そのような特質をもった相互関係を内面へと取り入れていくことによって、「抽出可逆操作の階層における内的対象関係」が発生してくるが、この時期の発達の制約を反映して、価値的な水準における自己や他者に対する認識や評価は一方的なもの、ないしはその時々によって正反対にも変化しうるような、「分裂」(splitting)したものになる場合も生じてくる<sup>30)</sup>。

しかし、3次元形成期において、ルール等が媒介することによって、個人間の等価性、対称性を実現することができたのと同様に、この時期の相互関係においても、社会的自立モデルなどを通じて取り入れられた外在的な価値が個人相互の間に介在してくることによって、個人間の等価性、対称性を成立させることが可能であり、それによって、青年期に固有の新たな質をもった友人関係や集団内部の相互関係が形成され始める。

このようにして、抽象的な価値ないしは「抽象的他者」を介在させることによって、具体的な他者との間に等価性、対称性を成立させる相互関係を発生させつつ、情動・社会性の局面においても抽出移行変換可逆操作の操作関係を準備していく。

その後、通常の場合、20歳前後の時期に、発達の諸局面における抽出移行変換可逆対操作の獲得(ex. 上部構造における微積分の法則性についての認識)と連関しつつ、情動・社会性の局面においても、抽出移行変換可逆対操作が獲得され、世界観的な価値を表わす「抽象的他者」との相互関係における相互性、すなわち、「価値的な水準における相互性」が実現されていくと考えられる。

そして、そのような相互関係が内面へと反映されていくことによって、抽出可逆操作の階層における、自我内部の「自己—他者」関係、内的対象関係が獲得され、青年期における「自我同一性」の確立のための発達の基礎が形成されていくと推測される。

また、そのような抽象的な価値をその背後にもつ、両親や教師、友人等の具体的な他者との相互関係においても、この価値的な水準における相互性の実現されていくと推測される。しかし、3次元変換形成期以降に関する詳細な検討は今後の課題としたい。

## 2章 変換可逆操作の階層における情動社会性の局面でのつまずきの発生機序について

この章では、1章での考察を受けて、変換可逆操作の階層における情動・社会性の局面での発達のつまずきの発生機序について、心身症、神経症等の陰性の問題事象に視点を当てつつ、理論仮設的な提起を行ないたい。

### (1) 変換可逆操作の階層への飛躍的移行の過程でのつまずき

通常の場合、9、10歳前後の時期において、他の発達の諸局面と連関しつつ、情動・社会性の局面における変換移行次元可逆対操作の獲得を必然たらしめるだけの可逆操作力と可逆操作関係との矛盾が増大してくるが、その矛盾の発達の外在化を可能にする教育的な人間関係が保障されていない場合、仲間集団等の相互関係において、変換可逆操作の階層における相互性の第1段階を実現していくことに困難さが生じてくる。

また、それとは別に、9、10歳以前の時期の発達過程、例えば、3次元形成期において、何らかの内的・外的諸条件によって、情動・社会性の局面において、書きことば等の新しい交流の手

段を介した相互関係の発生に弱さがみられた場合、変換可逆操作の階層における相互性の第1段階の成立を可能にする内部矛盾の発生そのものが困難になってくる。

両者のいずれにおいても、仲間集団内部の相互関係において、「いじめ」などの社会的な矛盾に直面すると、そのような外的な諸作用がこの時期の不安定な内的諸条件を介して負の作用を引き起こし、跋毛その他の神経症的症状や腹痛などの心身症的な症状を現象化させる場合が生じてくる。例えば、間宮<sup>31)</sup>は、この変換可逆操作の階層への飛躍的移行の前後の時期での発達のなつまづきを抱えていると見られる心身症児の多くが、せいぜい身体症状を自覚するのみで、内面の心理、葛藤の自覚が著しく困難であることを指摘しているが、このような心身症児の多くは、他の発達の諸局面でのつまづきとも関わって、集団内部の相互関係において、反省的思考の水準における相互性の第1段階を成立させていきつつそのことを介して内面性を啓啓していくことに困難さをもっており、その結果、外的な諸条件が内的な諸条件を介して負の作用を引き起こし、心身症という2次的な症状が出現してきているのではないかと推測される。

しかし、この階層間の飛躍的移行の前後の時期での情動・社会性の局面でのつまづきは、乳・幼児期からの発達過程のつまづきを複雑に反映してきているため、本稿で十分な検討を行なうことは困難である。今後、次元可逆操作の階層における相互性の発展過程とその内面への反映としての内的対象関係の形成過程についての考察を行なっていく中で、さらに検討していく必要があると考えられる。

## (2) 変換可逆操作の階層の第1段階から第2段階における相互性の発展過程でのつまづき

この時期、通常の場合、他の発達の諸局面と連関しつつ、情動・社会性の局面においても変数1の可逆操作の並列化から系列化が進行し、可逆操作力が変数2であるのに可逆操作関係が変数1のままであるという内部矛盾の先鋭化がみられるが、そのような先鋭化された内部矛盾の発達の外在化が求められてきているにもかかわらず、それに相応しい相互関係が仲間集団内部での活動や交流の中で十分に保障されていかないとき、相互性の第1段階から第2段階への発展が困難になってくる。そのような場合、友人関係などにおける親密な相互交流等を介して内的対象関係の不確定さを克服していくプロセスにもつまづきが生じ、仲間集団との「分離不安」とも呼び得るような症状や対人関係における著しい過敏さ等が現象として現われてくる。

さらに、「集団いじめ」に見られるような仲間集団内部の相互関係の歪みが内的な諸条件を介して内面へと反映されていくと、内的対象関係の歪みが生じ、情動・社会性の局面における内部矛盾が負の作用を引き起こすことによって、心身症ないしは神経症的な症状があらわれ、不登校の契機になるような場合も生じてくる。そして、そのような状態が長期化してくると、内的な対象関係の歪みの克服がさらに困難になるが、とりわけ、他の発達の諸局面においては可逆操作の高次化が達成されていく時には、情動・社会性の局面との層化現象が生じてくるため、内部矛盾の負の作用がさらに増大してくることによって、神経症的な症状等の問題事象を一層深刻化させていく事態も生じてくると考えられる。

## (3) 変換可逆操作の階層の第2段階から第3段階への移行期における、新しい相互関係の発生過程でのつまづき

変換可逆操作の第2段階から第3段階への移行期においては、他の発達の諸局面における変数2の可逆操作の並列化から系列化への発展と連関しつつ、情動・社会性の局面においても、変換可逆操作の階層における第2段階の相互性の発達の特質を有する内一外の相互関係も統合されていき、田中の言う「集团的規律の普遍化」を促すとともに、この階層における内的対象関係も統合、普遍化されていく。しかし、仲間集団等の個人相互の関係において、変換可逆操作の階層の第1段階から第2段階における相互性の発展過程につまづきが生じている場合、この階層での内的対象関係、すなわち、自我の内部の「自己—他者」関係の統合、普遍化が困難となり、それが現象面では、対人関係場面での不安感や著しい過敏さ、あるいは自己評価の不安定さや自己受容の困難さ等をもたらしてくる。

このような場合、他の発達の諸局面において抽出移行変換可逆操作の操作関係が準備されてくる時期になっても、情動・社会性の局面においては、内部矛盾の発達の外的な外在化によって新しい交流の手段を用いた相互関係を発生させていくことが困難になり、その結果、外的な諸関係が内的な諸条件を介して負の作用を及ぼし、内的対象関係の不確定さとも相俟って、対人恐怖や視線恐怖等の神経症的症状が現象してくるとみられる。

また、新しい交流の手段を用いた相互関係の発生の困難さは、「社会的自立モデル」等を介して取り入れた価値を拠り所として、両親等の身近な他者から与えられてきた「価値」を転倒させて捉え、それまでの相互関係を組み換えていくことの困難さをもたらすため、価値的な水準における自立の達成が著しく困難になってくる。

さらに、このような内的対象関係の不確定さによって安定した自己認識や自己受容が形成されない状態にあるにもかかわらず、抽象的思考をその交流の手段とする新しい相互関係が発生してくる場合には、「抽象的な他者」との相互関係において一方向的に自己を捉えることによって、「同一性の喪失」とも呼び得るような離人症的な症状等も出現してくる<sup>32)</sup>。

それと同時に、この時期に発生してくる相互関係の内面への反映としての新しい内的対象関係＝自我内部の「自己—他者」関係は、この時期の発達の制約によって、全面否定の関係と全面肯定の関係とに分裂しがちであるため、それ以前の発達のなつまづきとも相俟って、境界例のケースに見られるように、他者に対する態度が全面肯定から全面否定へと激変するような場合も生じてくると推測される<sup>33)</sup>。しかし、これまで精神医学の分野において研究されてきた、思春期に現象してくる多様な精神障害についての具体的な検討は今後の課題としたい。

### 本稿での到達点と今後の課題

本稿では、学童期から思春期の時期に視点を当て、個人相互の関係における相互性の発展過程とそれを介した内的対象関係の形成過程及びその過程でのつまづきとしての問題事象の発生機序について、可逆操作の高次化における階層—段階理論に依拠しつつ明らかにすること試みた。

本稿によって、ピアジェの理論的枠組によっては十分には解明し得なかった、情動・社会性の局面での問題をもつ児童・生徒の抱えている発達のなつまづきの質を診断し、そのつまづきの克服に向けての教育内容・教育方法の問題を考えていくための基礎的な理論的枠組を提起できたと考える。

また、本稿においては、これまで、カーンバーク (Kernberg, O.)<sup>34)</sup> 等を中心とする対象関係

論的自我心理学においては、乳・幼児期を中心にして考察されてきた内的対象関係の形成過程を、学童期・思春期の時期に視点を当て、他の発達の諸局面との連関を捉えつつ考察したが、今回提起した理論的枠組は、基本的には他の発達の階層にも成立しているとみられるので、この理論的枠組を基礎として精神分析等の先行諸理論を批判的に吟味、再構成していくことが可能になったと考える。

今後、今回は考察の対象にできなかった次元可逆操作の階層、および抽出可逆操作の階層における相互性の発達過程とその反映としての内的対象関係の形成過程についても、精神分析の諸理論等を批判的に吟味、再構成しつつ考察を進めていきたい。

#### 注・引用文献

- 1) Erikson, E. H. 1959 小比木啓吾訳編 1973 自我同一性 誠信書房第2部第1章
- 2) 山岸 明子 1986 行動の主体としての自我の形成 教育学研究 53(4) pp. 347-354
- 3) 前田重治 1985 臨床精神分析学 誠信書房他参照
- 4) Piaget, J. & B. Inhelder Parsons, A. & Miligram, S. (Tr) 1958 The growth of logical thinking from childhood to adolescence: New York Basic Books p. 134
- 5) Selman, R. 1980 The growth of interpersonal understanding: Developmental and clinical analysis. New York: Academic Press
- 6) Sullivan, H. S. 1953 The Interpersonal Theory of Psychiatry. New York Norton
- 7) Youniss, J. 1980 Parents and Peers in Social Development: The University of Chicago Press
- 8) 楠 凡之 1987 学童期における「社会的自己」の形成に関する1考察 人間発達研究所編 人間発達研究紀要 創刊号 pp. 32-43
- 9) Piaget, J. 1947 波多野・滝沢共訳 1967 知能の心理学 みすず書房 pp. 310-311
- 10) 「可逆操作の高次化における階層一段階理論」については、田中昌人 1980 人間発達の科学 及び 1987 人間発達の理論（ともに青木書店）を参照のこと
- 11) 他者との相互関係ないしは内的な対象関係において、2方向的、可逆的な相互関係が成立している状態を捉える用語としては、エリクソンのように、mutuality を用いている場合と、ピアジェのように reciprocity を用いている場合があり、その用い方は研究者によってまちまちである。また、reciprocity に関しては、このような等価的、対称的な相互関係の状態を意味している場合と、ユースのように、単に相互関係（その中には非対称的な相互関係も含まれている）を意味している場合とがある。本稿で言う相互性という様式のカテゴリーは、先行諸研究を参照しつつも、各発達段階における内一外の相互関係の質的な高次化のプロセスを捉えるために、相対的に独自のカテゴリーとして提起したものであるが、その訳語としては、ピアジェが具体的操作期に成立するとした可逆性の1様式である reciprocity との区別と連関を捉えるため、reciprocity という用語は用いず、mutuality の方を用いることにした。なお、様式のカテゴリーについては、田中 1980 前掲書 pp. 3-15 を参照のこと
- 12) Sullivan, H. S. 前掲書 pp. 227-244
- 13) この章での「可逆操作の高次化における階層一段階理論」に基づく考察を行なうに際しては、主要には田中の「人間発達の科学」第Ⅱ部第2章第2節及び「人間発達の理論」第Ⅰ部第3章を用いた。
- 14) Selman, R. 前掲書 p. 38
- 15) 「反省的思考の水準における相互関係」とは、変換可逆操作の階層における個人相互の関係の発達の質を表すものであるが、この相互関係自体は、前階層の第3段階への移行期において、書きことばという新しい交流の手段の発生にともなって発生してくる。
- 16) Youniss, J. 1980 前掲書 pp. 150-151
- 17) Piaget, J. & Inhelder, B. 1966 波多野完治・須賀哲夫・周郷博共訳 1969 新しい児童心理学

- 白水社 pp. 98-102 他
- 18) 田中 1987 前掲書 p. 86
  - 19) Youniss, J. 前掲書 p. 153
  - 20) Piaget, J. 1964 滝沢武久(訳) 1968 思考の心理学 みすず書房 p. 75 他  
なお、本稿では、the principle of reciprocity を「相互性の原理」と訳した。
  - 21) 浜田寿美男編 1983 ワロン／身体・自我・社会 ミネルヴァ書房 pp. 241-242
  - 22) 田中 昌人 1988 子どもの発達と健康教育② かもがわ出版 pp. 179-183
  - 23) Sullivan, H. S. 1953 中井久夫・山口隆訳 1976 現代精神医学の概念 p. 57
  - 24) Youniss, J. & Smollar, J. 1981 Social Development Through Friendships In Rubin, K. H. & Ross, S. H. (Ed.) Peer Relationships and Social Skills in Childhood: Spring Verlag pp. 279-297
  - 25) 田中 1987 前掲書 pp. 144-45
  - 26) 田中 同上
  - 27) ここでは「抽象的他者」と名付けたが、その他、他者一般、超越的他者等の呼び方も可能である。なお、この部分の考察に際しては、中井久夫・山中康裕編 1978 思春期の精神病理 pp. 63-88, pp. 255-285 等を参照
  - 28) Erikson, E. H. 1967 岩瀬傭理訳 1969 アイデンティティ 青年と危機 北望社
  - 29) 社会的自立モデルについては、田中 1988 子どもの発達と健康教育③ かもがわ出版 pp. 52-60 の解説を参照
  - 30) 小比木啓吾 1976 青年期精神療法の基本問題 青年期の精神病理 1 pp. 239-294
  - 31) 間宮正幸 1986 少年期における臨床的問題と人格発達 心理科学研究会編 心理科学 第9巻 第2号 pp. 16-32
  - 32) 大橋一恵 1978 思春期の離人症 中井・山中共編 前掲書 pp. 147-166
  - 33) 森 省二 1978 思春期と境界例 中井・山中共編 前掲書 pp. 189-221
  - 34) Kernberg, O. 1976 前田重治監訳 1983 対象関係論とその臨床 岩崎学術出版

(博士後期課程)